

20世紀初頭におけるインターナショナル・ハーベスター社の農業普及活動

谷 口 佳菜子

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

要 旨

1862年のモリル法成立以降、アメリカ合衆国における農業教育は進展した。それと同時期に、アメリカの農業は発展し、農業機械は改良されてきた。本研究の目的は、20世紀初頭において、農機具メーカーが農業普及にどのような活動を行っていたかを考察することである。インターナショナル・ハーベスター社を事例として、同社が設立したIHCサービス局と農業普及部門の活動から農機具メーカーによる農業普及活動を明らかにした。

キーワード

インターナショナル・ハーベスター社、農業普及、農業教育

1 はじめに

アメリカ合衆国(以下アメリカとする)では、第一次世界大戦まで着実に農業が発展してきた。19世紀の後半からアメリカでは農業普及事業(Agricultural Extension Work)が行われるようになり、農業教育が展開されていく。1862年の農学と工学に特化した大学を支援するモリル法(Morrill Land-Grant College Act)により、州立大学が広くつくられるようになった。1887年のハッチ法(Hatch Act)では州立大学に農業試験場が付与されることになり、1890年に国会を通過した第2モリル法(The Second Morrill Act)において補助金が出るようになって大学研究が広く実施されることになった。そして1914年のスミス・レーパー法(Smith-Lever Cooperative Extension Act)をもって州立農業大学を中心とした農業教育が推進されていくことになる。

連邦政府による法律制定で農業教育システムが確立される一方、農業機械も発達してきた。19世紀後半から畜力を用いた刈取機(reaper)や収穫機(harvester)が出現し普及するようになった。世紀転換期までに農機具メーカーによ

る競争は激しくなり、1902年には主要な農機具メーカーの合同によってインターナショナル・ハーベスター社(International Harvester Company、以下ハーベスター社とする)が誕生することになった。

巨大企業として成立したハーベスター社に関しては、Chandler(1977)や小林(1978)、Carstensen(1984)により、その国内外の事業活動が注目されてきたし、Ozanne(1967)や上野(2000)などによって、労使関係の研究が盛んに行われてきた。本研究の当該期となる20世紀初頭にあっては、ウェルフェア・キャピタリズムの台頭がBrandes(1976)や、伊藤(2008)によって明らかにされている。しかし、農業普及事業が展開していく世紀転換期における、同社の農業普及に関する具体的な内容はほとんど言及されていない。またアメリカの農業普及事業については、大学や政府機関の活動に焦点をあてその変遷が分析されてきた(佐々木、1999、2007; 曾・秋山、2005; 田島、1985; 堀、1990; 宮田、2002)ものの、企業による活動は断片的に言及されてきたにすぎない(Ferleger and Lan-

zonick, 1994; McConnell, 1969)。

そこで、本研究では20世紀初頭にハーベスター社が行っていた農業普及活動について考察していきたい。まずは同社が設立したIHCサービス局について分析し、次に農業普及部門について検討を加えていく。

2 IHC サービス局 (IHC Service Bureau)

1910年頃、農作物の生産量増大や集約的な農法の推進に関する議論が起こっている世の中の動きと相まって、ハーベスター社はIHCサービス局を開始している¹⁾。このIHCサービス局というのは、広告部門の一部として設置されており、IHCサービス局の業務は、農民には直接価値があるもので、ハーベスター社にとっては間接的に価値があるものであるとされた。その業務は顧客の関心のために役立つことであり、サービスであった。ここではIHCサービス局による活動について検討していこう。

(1) 農業に関する情報の提供

IHCサービス局の重要な役割の一つに農業に関する情報の提供があった。同局は、農村社会に農業に関する有益な情報や知識を与えるため、本や小冊子を作成し配布していた。1913年までに作成されていた本のタイトルと内容についてみると、変化に富んだものであることがわかる。

1913年の社内誌 *Harvester World* から得られる同社発行の本のタイトルと主な内容は次のようなものであった。

① *The Story of Bread*

安価なパンのためのはるか昔からの努力とそれが最終的にどのようにして得られたか、という快活でおもしろい話。これは *The Dawn of Plenty* という講義 (lecture) につながった。また、これは訓話や社説のテーマとして利用され、男女、子供関係なく楽しめる。

② *Creeds of Great Business Men*

今日あるビジネスを促進してきた何人かの人の楽し

い短編によって展開されるビジネスの話。この短編を通じて、物々交換の時代からサービスと効率性という現代へ至るビジネスの移り変わりをみることができる。この本はもう一つの講義 *The Builders* につながった。

③ *The Golden Stream*

酪農をさまざまな面からみたわかりやすい日常的な教科書。この本は非常に広く利用されており、確かな筋から集められた多くの価値ある情報や統計を含んでいる。酪農に大きな関心がある場所でのこの本は毎日参考とされる。

④ *For Better Crops*

アメリカの第一線の穀物専門家による農業科目に関する貴重な記事のコレクション。この本は農場生活のほとんどすべての面に触れている。かつての *Farm Science* に取って替わったもので、最新の本の中でもかなり価値があるものである。

⑤ *The Story of Twine*

この本は、バインダー・トワインに関する情報を求める多くの声への回答として刊行された。原料繊維がユカタンで成長してから完成品として船積みのためにボール状になるまでのトワインの生産・加工についてかなり詳しく明らかにしている。

⑥ *The Engine Operator's Guide*

これは、ガソリン・エンジンを作動したり、修理したり、良好な状態に保つ方法に関するすべてを伝える小さな本である。ガソリン・エンジンを所有する人々、操作する人々、関心のある人々にとって価値あるものである。この本は取扱説明書であり、物語ではない。

⑦ *The Cattle Tick*

牛に生息するダニとそれを取り除くための最適な方法。この本は、南部の州に住む人々にとって特に価値がある。ウシダニによる毎年の損失は、約1億ドルであると推定される。この本は図解入りで、どうやってダニが牛を滅ぼすのかということを説明している。

⑧ *For Better Crops in the South*

この本は *For Better Crops* に多少似ている。しかし、南部の穀物や状況に詳しい農業の専門家によって作成されたものである。この情報は信頼性があり、ほとんどの規模、種類の農場に適用できる。

⑨ *The Disk Harrow*

非常に少ない農民だけが穀物の栽培においてディスク・ハロウで耕す方法を知っている。この本では、どのように播床が準備されるべきかが説明されており、またこの作業で機能する部品について述べられ

ている。この本はあらゆる地域の農民たちに価値のあるものであるが、特に乾燥した地域の農民たちに価値がある。

⑩ *The Binder Twine Industry*

この本は *The Story of Twine* と同様の要点を扱うが、まったく異なる方法で論じられている。これは、サイザル麻の耕作と収穫、トワインの生産におけるさまざまなプロセスを示す3色刷り48ページの絵本である。

⑪ *Harvester Scenes of the World*

これはきれいに装丁された2色刷りの150ページの本である。芸術的な絵本であり、絵は世界の収穫場面の貴重なコレクションとなっている。これらの絵は、紀元前2500年から1913年までの収穫の発展をたどったものである。

⑫ *Building Plans*

各種農舎の印画と設計書である²⁾。

こうした教育的な本を作成したきっかけはというと、たとえば *The Story of Bread* は、ハーベスター社の従業員が、教師が農業の発展と文明化と農業の関係に触れた何冊かの良書を学校で必要としているという新聞記事を読んだことにあった³⁾。このようなさまざまな種類の本は、学校で補助本として利用されるようになっていく。

また、ハーベスター社は、農民が直面している問題を解決するように農業誌紙に記事を提供するなどの協力を行ったりしていた。農業に関する一般的なことから専門的なことまで、子供から農業を仕事とする人まであらゆる人々に情報を提供することでIHCサービス局は農業教育の向上に貢献していたことがわかる。

上記の本のリストの中に講義という記述が出てきたが、次にその講義内容についてみていこう。

(2) 講義

印刷媒体による情報提供以外に、ハーベスター社は、動画 (moving pictures) やスライド (lantern slides) を用いて農業をテーマとした講義を行っていた。その講義の一つが

The Romance of the Reaper である。これは、もともと共進会 (state fairs) のための広告の一種であったが、その話が非常に関心と呼ぶものであると考えられたため、徐々に広告の要素が消されていき教育用の講義となっていった⁴⁾。1912年頃までには、2,000回以上学校や、大学、講習会、教員講習会、農事講習会 (farmers' institutes)、共進会、ディーラー集会 (dealers' conventions) などで行われていた。

The Romance of the Reaper は、農業の発展について、とがった棒や刈り鎌、殻ざおといった農具を使っていた頃から、リーパーの発明、そして現在の改良された近代的な機械や方法までを見ていくものであった。さらに、講義では、ハーベスター社が扱う製品ラインを人々の前に置くだけでなく、いかに製品が注意深く作られ、使われている材料が高品質であるかが説明された⁵⁾。

さらに、工場内の機械は素晴らしく、熟練工や従業員たちは、衛生的な状態で働いていることが述べられ、トワイン・ミルで働く少女たちの衛生と健康に留意する既婚婦人 (matrons) の写真が示された⁶⁾。このようなハーベスター社の労働環境についての説明は、1912年にトワイン・ミルで働く女性たちが重労働をしていることや工場の不衛生さ、少ない給料、夜勤労働が新聞記事によって公にされた⁷⁾ことを受けての対応であると考えられる。この時期はハーベスター社がさまざまな福利厚生プログラムを導入しているが、Ozanne (1967) によって、それはシャーマン反トラスト法 (Sharman Anti-Trust Law) 違反による告訴を避けるためのイメージ対策であったことが指摘されている。この方針は他の事業にも影響があったといえ、講義での好ましい労働環境の主張もその一つであっただろう。

反トラスト法違反への対策であったとすれば、ハーベスター社の農業普及への取り組みは受け入れられなかったのであろうか。 *Harvester World* によれば、講義を行ったある人物は、*The*

Romance of the Reaper を11月1日から5月15日まで合計で92,000人に公開しており、また別の者は、同じ講義で2月25日から5月15日の間に30,000人を集めている⁸⁾。また専門家や企業家は楽しむのではなく、教授してもらうために20マイル離れたところからこの講義を見に来たという例や、講義に参加した少女の1人が父親に改良されたクリーム分離機を購入するように求めたという例が挙げられている⁹⁾。また、1912年には3か月間で、イリノイ大学(University of Illinois)やノースダコタ州、イリノイ州、インディアナ州、ウィスコンシン州などで、合計12回の講義が行われていた¹⁰⁾。こうした一連の記述をみると、講義は人々に受け入れられ一定の評価を得ていたようである。

ハーベスター社は The Romance of the Reaper に続いて The Dawn of Plenty という講義も始めているが、これはより有益でエンターテインメントの要素を盛り込んだものであったようだ。同社は、知識の大部分は見ることから由来すると指摘した上で、動画やスライドを取り入れた講義が教育に力を発揮すると述べている¹¹⁾。この講義では同社自身については触れないようになっていた。

このように、広告の一部として位置づけられていた講義は、農業普及活動に不可欠なものになっていったのである。

(3) 農機具の貸出

ハーベスター社は前述したような本の配布や資料の貸出だけでなく、大学や農業に関連する学校などに自社の農機具を貸し出していた。たとえば、イリノイ大学にハーベスター社は5,400ドル相当の農機具を貸し出している¹²⁾。そこに貸し出されていたのは、グレイン・バインダー (grain binders) やコーン・バインダー、バインダーの付属部品、草刈機、レーキ、ローダ (loaders) 、肥料散布機、ワゴン、ガス・エンジン、トラクター、クリーム分離器、ハロウ (harrows) 、トウモロコシ刈取機 (corn pickers) 、

ドリル、点播機 (corn planters) 、トワインといったものであった¹³⁾。このようなさまざまな種類の機械は学生に広い知識を与え、個々のニーズに応じたようである。

大学にとってあらゆる種類の多数の農業機械を準備することは金銭的な負担が大きくなるが、学生の関心に合わせるためにはそれらをそろえる必要があった。農業工学を専攻する学生は、さまざまな種類の機械について教室で理論を学び、実際の機械を操作する。その際、学生は機械の細部まで理解しておくことが求められた¹⁴⁾。教室では、学生はある特定の機械の理論を教えられ、必要不可欠な部分について、それらが何を意味し、何を遂行するのかということ学ぶ¹⁵⁾。それから、その特定の機械のさまざまな型について議論され、同じ本質的要素が各種各様の型で説明されるのである¹⁶⁾。そのため、大学は複数の企業から農機具を借りていた¹⁷⁾。また、機械が授業で使用されていないときには、展示フロアに置かれており、興味のある者が綿密な調査ができるよう配慮されていた¹⁸⁾。

イリノイ大学にはハーベスター社の機械を多く利用するコースがあった。それは、収穫機の専門指導者を養成するコースである。このコースは人気のあるものの一つであるが、有能な学生たちだけがそれを修了することができた。彼らは、自分たちが各部品やその機能、その正確な位置を十分に把握し、ハーベスター社製のバインダーを細かく解体し、もう一度それを素早く組み立てなければならなかった¹⁹⁾。それから彼らはバインダーのトラブル、特にバインダーの付属部品のトラブルへの対応の練習を行い、すべての調整を行って影響を調べ、トラブルの場所を見つけて改善する必要があった²⁰⁾。同様の作業はヘイ・ツール (haying tools) と散布機でも行われた。

こうした作業を経た多くの学生の中から優秀な4~8人が収穫機メーカーの専門スタッフとして毎夏巡回することになった。そしてその中

の数人がセールスマンとして企業の中に残った。これは優秀な学生にとって非常に貴重な経験である一方、ハーベスター社にとっても望ましいことであった。同社は機械を大学に貸し出すことで、自社製品に詳しい優秀な人材を獲得することができたのである。

IHC サービス局は広告部門の一部として、農業に関する情報を提供したり、農機具を大学に貸し出したりする業務を行った。しかし、当初から同局の業務は広告にすべきではないと考えられていた。そこで、IHC サービス局の業務は「間接的広告 (indirect advertising)」ではなく、同局を広告部門や販売部門から完全に分け、新しい名前と本部を与えることが適切であると判断される²¹⁾のである。そして、農業普及部門 (Agricultural Extension Department) が誕生し、その一部として IHC サービス局が機能することになった。

3 農業普及部門

(Agricultural Extension Department)

ハーベスター社は1913年には農業普及部門を設置している。農業普及部門の目的は、アメリカ農業の方法を改善し、精密な情報を供給することとされた。ハーベスター社は、この業務は農業の向上に利益をもたらすものであって、商業主義ではない²²⁾と主張している。同部門の責任者となったのは、アイオワ州立大学 (Iowa State University) で教鞭をとり、同州で農業普及に取り組んだ Perry G. Holden であった。

ハーベスター社の農業普及部門は、教育機関の事業を補完する目的で組織されたわけではなかったが、アメリカで農業に関する教育事業を行うあらゆる機関を支援する精神で設置された²³⁾。その主な内容は、以下の通りであった。

① 農業大学やその他の教育機関、アメリカ合衆国農務省の農場実演者 (field demonstration agents) 商業会議所、鉄道会社、銀行の提携、新聞社やその他の

機関との協力のもと、農業キャンペーンを行う。

- ② 農業の講義用図表やスライドを資料の効果的な利用を行う個々の学校あるいは機関となる農業大学や学校に無料で貸し出す。
- ③ 農業、家畜、酪農業、家政学やその他の多くの科目に関連する多くの科目に教育的な資料を流通させる。
- ④ 求めてきたすべての人に文書を通じて信頼できる情報を供給する。
- ⑤ 農業の確実で有益なシステムとして多角的農業経営と家畜の発育を推奨する。
- ⑥ 農業の教育科目を取り上げた雑誌や新聞の特別な記事の発行。
- ⑦ 農業をテーマとした動画や図解の立体幻灯機 (stereopticon) 講義の利用。
- ⑧ 穀物の害虫を撲滅するためのキャンペーンや八工を駆除するための健康キャンペーン、豚コレラやウシダニなどに対するキャンペーンなど、異常事態に応じた緊急キャンペーンの実施²⁴⁾。

1916年1月1日までに農業拡張部門は、北部、南部、西部、中西部の24か所で48のキャンペーンを支援しており、これには191万1,673人が参加している²⁵⁾。ここではキャンペーンの内容について注目したい。

ハーベスター社の農業普及部門は、農業大学やその他の機関とともにキャンペーンを行っていた。1913年頃に行われていたのがアルファルファ・キャンペーン (Alfalfa Campaign) である。これは、コーンベルトにおいてアルファルファの栽培を促進するキャンペーンであった。アルファルファの強みとして、1エーカーあたりの生産量がクローバーの2倍と高く、ブラン (bran) と同じくらい高い飼料価値を持つ、タンパク質の豊富なものであること、一度豊作となると湿潤な地方では4年から6年、西部ではもっと長く豊作が見込めること、すべての動物に食物として与えられるということが挙げられた²⁶⁾。コーンベルトでは、トウモロコシの栽培と養豚が組み合わされた農業が行われていたため、飼料としても高い価値を持つということが強調されたのである。

1913年4月時点でのキャンペーンの計画によると、キャンペーンは車で4月の初めから秋の終わりまで行われる²⁷⁾というものであった。学校や大学のカウンティや市の責任者、機関の従事者、講演の講師、この業務に関心のある人たちがアルファルファの図表やスライドを手に入れるようにする。また、アルファルファの資料や小冊子は、国中に広く配布される。特別なアルファルファの記事が農業誌に送られ、新聞に印刷され、アルファルファに関する内容の新聞がキャンペーンの実施場所で発行されるようになる。そして、このキャンペーンは、時間と資金を快く提供するコミュニティの家畜協会や酪農協会と協力して実施される。コーンベルトとコットンベルトの各州や東部ではすぐに開始されるべきものであり、各コミュニティで30から40の会合が地方の状況に応じて行われるようにするという計画があった。

このアルファルファ・キャンペーンは、輪作への転換を勧めていた。1909年から1919年までにハーベスター社がキャンペーンを行っていた州のクローバーとアルファルファの生産量を統計局の数値で確認すると、大きな変化をみせなかった州もあったが、アイオワ州では約3万6,000ブッシェルから約142万ブッシェルへとおよそ4倍、ノースダコタ州では、807ブッシェルから約5万6,000ブッシェルへとおよそ70倍、ミシシッピ州については175ブッシェルから約1万8,000ブッシェルへおよそ100倍という大幅な増加がみられたのである²⁸⁾。

一方、ミシシッピ州の南西部に位置する23のカウンティでは、多角的農業システムに注目してもらうためのキャンペーンが行われた²⁹⁾。このキャンペーンはハーベスター社の農業普及部門によって組織され、アメリカ農務省、イリノイ・セントラル鉄道、農工大学、ミシシッピ南西部の連合商業クラブ（federated commercial clubs）、一般の農民や企業家と協力して実施された。このキャンペーンは農業普及部門から演説者のスタッフとともに同部門の責任者

Holden によって支援されたものである。キャンペーンの長さは18日間で、自動車で巡回した距離は4,503マイル、鉄道によって巡回した距離900マイル、開催された会合は249回で、配布された資料は75,000部、参加者は17,579人となった³⁰⁾。演説者は、トウモロコシとマメ科作物の作付、家畜の飼育、ウシダニの撲滅を主張し、いかに単作が土壌を貧弱にするかについて述べた³¹⁾。

これらのキャンペーンから、ハーベスター社の農業普及部門が他の機関と協力し、アメリカの農法の向上に努めていたことがわかる。

4 む す び

本研究では、20世紀初頭におけるハーベスター社による農業普及活動を分析してきた。同社は、IHC サービス局、後には農業普及部門の設置により、農業大学や農村社会に支援や教育を行っていた。農務省と州立農業大学の協力による農業普及事業の展開に合わせるように農機具メーカーも活動を拡大していったのである。

ハーベスター社が農業向上を推進したのは、自社製品の普及を目指した利益追求のための活動の一つであったとも考えられるだろう。20世紀初頭にはトラクターが登場するなど畜力から動力へと農機具業界では技術革新が起こったが、農業機械は耐久財であるため、一度購入されると当分買い替えは見込めない。そこでハーベスター社は新製品開発や企業買収により農場で必要とされる製品ラインをそろえたり、海外市場を開拓していくようになる。しかし、本格的なアメリカの農業機械化は1920年代以降であり、大規模農場化するのも第2次世界大戦後のことである。それ以前においては、トラクターなどの農業機械はまだ導入されたばかりの新製品であり、農機具業界において重要な地位を占める存在であった同社が農村社会や大学に最新の農機具を紹介し、その普及を促すことは自社の売上に大きくつながるものであった。さらに、同社は大学と協力することによって、自社

製品の扱いに慣れた優秀な学生を得ることもできた。

他方、農機具業界で独占的な状態にあったハーベスター社は、いつ反トラスト法違反によって告訴されてもおかしくない立場にあった。事実、同社は1912年に告訴されているから、農業普及事業に積極的にかかわっていったのは、「善きトラスト」対策のためであったかもしれない。しかし、そのような状況にありながらもハーベスター社が農業普及活動のために部門を設立し、政府や教育機関、その他農業に関する諸機関と協力してその活動を遂行していったことは、アメリカ農業の発展において無視できないものであったと考えられる。

注

- 1) C. S. Funk, 'The Year's Progress,' *Harvester World*, December 1910, pp.14-15.
- 2) *Harvester World*, October 1913, pp.12-13, 27.
- 3) Edwin L. Barker, 'The Growth of Service', *Harvester World*, December 1913, pp.4-5.
- 4) *Harvester World*, November 1913, p.6.
- 5) E. J. Ortmeier, General Advertising Agency, Evansville, Indiana, 'On Booking the Romance Of the Reaper', *Harvester World*, March 1913, p.5.
- 6) *Ibid.*.
- 7) 詳しくは、Ozanne (1967) の chapter 5 を参照されたい。
- 8) ここでは、この期間に何回行われたかは明らかにされていない。'Passing of "The Romance of the Reaper"' *Harvester World*, June 1913, p.8. 本文中とは違う人物が、エバンズビル (Evansville) では6日間で5,500人が視聴に来ており、その95%が農民であったことを記している。(E. J. Ortmeier, op.cit., p.5.)
- 9) E. J. Ortmeier, op.cit., p.5.
- 10) *Harvester World*, November 1913, p.6.
- 11) *Ibid.*.
- 12) C. O. Reed, Instructor in Field Machines, 'Benefits Derived from the IHC Machine Exhibit in the Division of Farm Mechanics, University of Illinois', *Harvester World*, February 1913, p.6.
- 13) *Ibid.*.
- 14) *Ibid.*.

- 15) *Ibid.*, pp.6-7.
- 16) *Ibid.*, p.7.
- 17) *Ibid.*.
- 18) *Ibid.*.
- 19) *Ibid.*.
- 20) *Ibid.*.
- 21) *Harvester World*, January 1913, p.16.
- 22) *Ibid.*.
- 23) P. G. Holden, 'Its Purposes, and What it Offers in the Way of Assistance to Local Organizations', *Agricultural Extension, Something of its Meaning, the Forces Engaged in the Work, and of the Results Obtained*, 1916, pp.92-93.
- 24) *Ibid.*.
- 25) *Ibid.*, p.93.
- 26) 'IHC Plans for an Alfalfa Campaign', *Harvester World*, April 1913, p.4.
- 27) *Ibid.*, p.5.
- 28) U. S. Bureau of the Census, *Agriculture, General Report and Analytical Tables, Fourteenth Census of the United States Taken in the Year 1920*, 5, Washington Government Printing Office, 1922, p.789.
- 29) 'The Mississippi Campaign for Diversified Farming, Agricultural Extension Department Planning Several Big Campaigns', *Harvester World*, May 1914, pp.6-7.
- 30) *Ibid.*, p.6.
- 31) *Ibid.*, pp.6-7.

参考資料

- International Harvester Company, *Annual Report*.
 International Harvester Company of America, *Harvester World*.
 Agricultural Extension Committee of the National Implement and Vehicle Association, *Agricultural Extension, Something of its Meaning, the Forces Engaged in the Work, and of the Results Obtained*, 1916.
 U. S. Bureau of the Census, *Agriculture, General Report and Analytical Tables, Fourteenth Census of the United States Taken in the Year 1920*, 5, Washington Government Printing Office, 1922.

参考文献

- 浅羽良昌 (1996) 『アメリカ経済200年の興亡』 東洋経済新報社。
 伊藤健市 (2008) 『インターナショナル・ハーヴェスター社従業員代表制の研究』 関西大学出版部。
 上野継義 (2000) 『アメリカ近代産業企業における委

- 員会型管理システムと能率概念の転換：インターナショナル・ハーヴェスター社におけるフォアマン教育と合同委員会型従業員代表者制の生成」『経済経営論集』京都産業大学，第35巻第1号，56-117頁．
- 小林袈裟治（1978）『インターナショナル・ハーヴェスター社』東洋経済新報社．
- 佐々木保孝（1999）「アメリカ合衆国における農業拡張事業の成立 - コーネル大学を中心に - 」『教育学研究紀要』中国四国教育学会，第45巻第1部，362-367頁．
- 佐々木保孝（2007）「20世紀初頭のアメリカ合衆国における農村問題と農業拡張事業 - 『農村生活委員会報告書』（1909）の分析を中心に - 」『教育学研究ジャーナル』中国四国教育学会，第4号，51-60頁．
- 曾雅・秋山邦裕（2005）「米国における農業普及体制の変遷及び大学の役割」『鹿児島大農学術報告』鹿児島大学，第55号，77-83頁．
- 田嶋重雄（1985）『世界の農業教育』茨城書房．
- 立石寿一（1990）『現代アメリカ農業の形成』御茶の水書房．
- 馬場宏二（1969）『アメリカ農業問題の発生』東京大学出版会．
- 細野重雄（1949）『アメリカ農業の機械化』農業総合研究所．
- 堀雅晴（1990）「アメリカ農業普及事業の展開 - 20世紀初頭の利益集団形成史とも関連して - 」『島根大学』島根大学，第34巻第1号，27-55頁．
- 宮田由紀夫（2002）『アメリカの産学連携 - 日本は何を学ぶべきか - 』東洋経済新報社．
- Ban, A. W. van den and Hawkins, H. S. (1996) *Agricultural Extension*, Blackwell Science, second edition.
- Brandes, Stuart, D. (1976) *American Welfare Capitalism*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Carstensen, Fred V. (1984) *American Enterprise in foreign markets: Studies of Singer and International Harvester in Imperial Russia*. University of North Carolina Press.
- Chandler, Alfred. D., Jr. (1977) *The Visible Hand: The Managerial Revolution in American Business*, Harvard University Press.
- 鳥羽欽一郎・小林袈裟治(1979)『経営者の時代』東洋経済新報社．
- Ferleger, Louis and Lazonick, William (1993) 'The Managerial Revolution and the Developmental State: The Case of U. S. Agriculture.' *Business and Economic History*, 22 (2), pp.67-98.
- Ferleger, Louis and Lazonick, William (1994) 'Higher Education for an Innovative Economy: Land-Grant Colleges and the Managerial Revolution in America.' *Business and Economic History*, 33 (1), pp.116-128.
- McConnel, Grant (1969) *The Decline of Agrarian Democracy*, Atheneum.
- Ozanne, Robert (1967) *A Century of Labor-Management Relations at McCormick and International Harvester*, University of Wisconsin Press, Madison, Wisconsin = 伊藤健市(2002)『アメリカ労使関係の一系譜 - マコーミック社とインターナショナル・ハーヴェスター社』関西大学出版部．
- Rosenberg, Charles E. (1977) 'Rationalization and Reality in the Shaping of American Agricultural Research, 1875-1914.' *Social Studies of Science*, 7, pp.401-422.
- True, A. C. (1928) *A History of Agricultural Extension Work in the United States*, United States Government Printed Office.